

実験展示を記録する

実験展示の実施記録

中村 ひろ子

今回の展示がどのような論議を経てたどり着いた展示構想に基づくものであったかについては前章に詳しい。本章ではこの展示構想をどのように展示という形で提示できたかについて報告する。展示を企てる側は展示に託したメッセージを観覧者に届けるためにさまざまな手法や装置を仕掛ける。しかし、実施された展示は予算をはじめとする時間、展示空間、資料といった制約に照らして、それまで論議を重ねてたどり着いた展示構想案に修正を重ねた結果であるといえよう。また、テーマやメッセージといった目に見えないものを目に見えるものにしていく作業は、構想段階とは別の意味で共同作業である。展示場の設計者、デザイナーから映像製作者、照明や展示装置の施工者などさまざまな人々が展示を作り上げていく。Iではこの実施した展示の記録を資料編として編んだ図、写真などのデータとともに報告する。

また、展示は観覧者が展示空間に立つことによって初めて成り立つものである。IIではこの展示の観覧者と、その観覧者からアンケートの形で届けられた展示へのメッセージを、展示評価とそれを受けての修正についてとともに報告する。

I 展示の記録

I-1 開催要項

下記開催要項に従って展示を実施した。

- 1、展示の名称 「あるく—身体の記憶—」
- 2、主催 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化のための非文字資料の体系化」研究推進会議

3、展示期間

<前期>2007年11月1日(土)～30日(金)

10:30～16:30

ただし、11月3・4日を除く日曜・祭日は休室

<後期>2008年2月23日(土)・24日(日)

10:00～18:00

※23日(土)・24日(日)は国際シンポジウム開催日。

4、展示会場

神奈川大学日本常民文化研究所参考室

5、入場料 無料

6、展示の趣旨

COEの研究課題である図像、身体技法、環境・景観の体系化という成果を展示という形で社会に還元し、非文字資料という新たな研究領域の持つ可能性を研究者だけでなく、広く市民に向けても発信する。

また、発信にあたっては展示制作途中の市民による評価の導入など市民が参加して展示を作り上げる展示手法や展示が持つ視覚、聴覚、あるいは言語といったさまざまなバリアを超える展示手法など展示に「実験」を試みる。

7、展示のねらいと構成

<ねらい>

人類の基本的行為である「歩く」をテーマとした展示や体験を通して観覧者がそれぞれの身体に記憶されている「歩く」という身体技法に気づき、非文字資料がもつ豊かな世界に出会う。

<展示構成>

- A「あるく回廊」 B「あるく人生」
C「かつてのあるき方を探る」
D「脚の人生」 E「あるくに触わる」

F「はきかえて歩いてみよう」

8、印刷物

- ①ポスター ②案内葉書 ③リーフレット

I-2 展示構成と展示資料

展示を次のように構成した。展示構成のそれぞれに込めたメッセージについては前章で既に記した。ここでは図、写真などのデータを中心に報告する。() 内に対応する資料編の図版No.を示した。

(1) 導入

展示場のある建物2階入口の階段脇に展示案内板(3-1-1)を設置し、そこから展示場入口まで床面に「足跡」(3-1-2)を貼ることで誘導する。階段を上がった正面には「現代人の歩く姿の写真コラージュ」(3-1-3) パナールを設置しテーマである「あるく」をイメージさせた。また、大学入口正面の壁面には垂れ幕を下げて展示開催を表示した。構想では展示場のある壁面に足跡を貼る案であったが、実施が困難となり垂れ幕とした。

(2) 展示場入口

足跡をたどって行き着いた展示場入口には「開催挨拶」(3-1-4)と開催趣旨を記した『「あるく—身体」の記憶—』の実験」パネル(3-1-5)を配した。

(3) テーマA「あるく回廊」(3-1-6)

紗膜に囲まれた回廊は、映像「身体」の記憶の発見」により「かつてのあるき方」を示し、後半は映像とインストラクターに導かれて観覧者が実際に「歩く」を試みる空間として設置したが、同時に、観覧者が体験後は紗幕を通して映し出される他者の歩きを見る側に立つことを想定してのものでもあった。

(4) テーマB 「あるく人生」(3-1-7)

「熊野観心十界図」(円福寺蔵) 上半部に描かれた出生から死に至る各世代の歩く姿を「あるく人生」として提示した。構想ではあるき初めの儀礼などを通し人生のあゆみを展示する案であったが、このテーマを「熊野観心十界図」を通して伝えることに変更した。

(5) テーマC「かつてのあるき方を探る」

(3-1-10.11.12)

ケース内に収めたかつてのあるき方を描いた図像

資料と3枚の解説パナールにより、かつてのあるき方を探る試みを提示した。

①ケース1

実物資料 『絵巻物による日本常民生活絵引』原画「伴大納言絵詞」 『絵巻物による日本常民生活絵引』原画「石山寺縁起」 『東海道名所図会』

②ケース2

実物資料 『絵巻物による日本常民生活絵引』原画「親鸞聖人絵伝」 『絵巻物による日本常民生活絵引』原画「伴大納言絵詞」 『日本山海名物図会』

③ケース3

実物資料 『風俗画報21号』『風俗画報54号』「JAPAN 1904」

(6) テーマD「脚の人生」(3-1-8)

全編歩く姿を描いた映画「脚の人生」(マツダ映画社所蔵、芸術映画社製作、昭和10年前後製作と推定)を常時上映した。構想案にはなかったが、この映画「脚の人生」の存在を知り、新たに設けたテーマである。

(7) テーマE「あるくに触れる」(3-1-9)

人形を使ってかつてのあるき方と思われる三つのあるき方のフォームを復元し、点字によるキャプションを添付し、自由にフォームを変えられる人形とあわせ、触れる展示とした。

(8) 「はきかえて歩いてみよう」

最後に履物を用意し、日常履く機会の少ない履物を履く楽しさを通して履物の違いによる歩き方の変化を体験するコーナーとした。用意した履物は男性のハイヒール体験用の大きなサイズのハイヒール(25.5・26・26.5・27cm)、地下足袋、雨下駄、男物下駄、ぽっくり、一本歯下駄、ワラゾウリである。

I-3 インストラクターの存在

以上の展示構成にあってインストラクターの存在は欠かせない。展示と観覧者を結ぶだけでなく、特に「あるく回廊」では「あるき」を再現して見せる行動展示、すなわち一種の展示を構成する存在である。常時2名(内1名は神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科学生)を「あるく回廊」と「はきかえ

て歩いてみよう」に配置した。インストラクターに託したのは

- ①観覧者が「あるく」を試みることに誘いと共に歩くこと。
- ②プログラムに組んだ歩き方を模範的に演じてみせること。このため、開館前の1日を「あるき」の習得に当てた。
- ③履物を履き替えることへの誘い。
- ④観覧者の反応や声の収集記録。
「インストラクター日誌」に見聞きした観覧者の反応や声を記録すること。

I-4 印刷物

(1) ポスター (A2版) (3-2-1)

本展示のテーマ「かつての歩き方」をイメージした近世の図像をデザインした。全国の大学や博物館の他、地元の町内会を介して町内の掲示板や最寄りの白楽駅、東神奈川駅構内にも掲示した。

(2) 案内葉書 (3-2-2)

招待状に代えて案内葉書の形で広く配布した。

(3) リーフレット (A3版 三つ折) (3-2-3.4)

ポスターのデザインを表紙に使用し、「かつてのあるき方を探る」に焦点を当て、本COEプログラムの紹介を含んだ形で作成した。

I-5 展示の設計施工

展示設計は文化環境研究所（基本設計 原田豊・今井明）に、展示制作は乃村工藝社（制作管理 菊地陽一）に委託して実施した。

II 観覧者・アンケート・展示評価

II-1 観覧者

本展示はその趣旨に「非文字資料という新たな研究領域の持つ可能性を研究者だけでなく、広く市民に向けても発信する」と謳っており、研究者を含めさまざまな方々の来館を願った。しかし、常時展示場として公開されていない馴染みのない会場での1カ月間という期間での展示の周知は十分とはいえない

観覧者の傾向

神奈川区内	横浜市内	神奈川県内	県外	未記入	計
90名	158	86	102	173	609
15%	26	14	17	28	

神大生	神大教職	他大生	他大教職	その他	未記入	計
242名	67	6	17	138	139	609
44%	11	1	3	23	23	

かった。展示期間28日間の観覧者数はカウントしていないため正確な数は把握できていないが、芳名帳に記入された方々についてまとめたものが上記の表である。

当然のことではあるが本学の学生、教職員が過半数を占めており、広く社会へ発信ということからすれば不満足な結果であるが、大学所在地の神奈川区の方や横浜市内といった地域の方々の来館が多かったことはCOEとしてというより大学としてその研究成果を地元に戻元できたこととして評価しておきたい。

II-2 アンケート

展示への観覧者からの声を報告する。今回の展示にとって観覧者からの声は大変重要なものであった。仮説としてかつての歩き方を提示し問いかけた上で実際に歩いていただいた結果は、展示への評価であるだけでなく、この問いかけ、仮説への返信であると捉えていたからである。しかし、観覧者からの声を受信することは難しい。一つはアンケート用紙に記入をお願いするという形であるが、今回はアンケートといっても項目毎に回答の選択肢を設けるという方法はとらず、「展示をご覧になり、実際にお歩きになってお感じになったことがありましたら」というだけの呼びかけで年代、性別を問う形をとった。出来るだけ観覧や体験を終えてふと声になるものが聞きたかった。もう一つがインストラクターに託した観覧者の声を拾い記録する形である。体験をしながら、展示を見ながらの感想や質問、観覧者同士の会話などを耳にしたらノートに記録することを託した。この二つの形から返されてきたものを、幾つかを紹介する。

<「あるく」というテーマについて>

- ・一番身近な「歩く」に観点を置くことで印象深い
- ・先人の歩きをこのように振り返る展示は新鮮
- ・日常のふとした行動に着眼したことは素晴らしい
- ・歩くに重点をおいた展示は、はじめてみた貴重な体験
- ・「あるく」はめずらしい捉え方で面白かった
- ・珍しい展示
- ・あるくに着目したことも、展示の仕方もとてもおもしろい

<「かつてのあるき方」について>

- ・本当にこんな歩き方をしていたの
- ・歴史の中で形を変えて今まで続いてきたことに感銘
- ・普段考えることのなかった歩き方にもいろいろあると感じられた
- ・あるくという無意識な行為も記憶からきていると知り驚いた
- ・当たり前行動にも時代の流れによる変化があることが興味深い
- ・昔の歩き方がいかに違うかが体験によりわかった
- ・昔の歩きが今と違うことがわかったが、意識しないとわかりにくい
- ・時代により歩き方が変わることを初めて知った
- ・歩き方に歴史があることなど、初めて知ることが多かった
- ・膝を曲げ、腰を落とす歩きは日本人の体型、履物の影響か
- ・膝を曲げて歩く人は今もいるが、昔からの歩き方とは驚き
- ・なぜ変わったのか、軍制の導入か、目から鱗の内容
- ・戦時中木刀をかついで行進させられた時、多くの生徒が右足と右手を同時に出してしまい笑ったことを思い出した
- ・今の歩きはかなり西洋ナイズされ、あわただしくなっていると思えた
- ・日本人の歩くことの中に過去の記憶が入っているのは確か
- ・昔の歩き方はくらしに合った歩き方、現代は周囲

の目や常識による歩き方

- ・武道に通じる足の運びナンバ歩きを再確認した
- ・体験で歩き方に新しい発見ができた
- ・歩く体験がよかった
- ・貴重な映像をよく探してきた

<展示手法などについて>

- ・足跡がおもしろく踏んで歩きたくなった
- ・入口の足跡から体験までおもしろい展示
- ・映像を真似て歩くのがおもしろい
- ・ふしぎな体験・体験できてよかった
- ・一本菌、ハイヒールを履いて男でよかったと思った
- ・履物の体験がおもしろかった
- ・小さいスペースだが濃密
- ・「歩く人生」の絵がライフサイクルを描いていて興味深い
- ・「脚の人生」という映画があるなど興味深い展示でおもしろかった
- ・デザインがおしゃれで見やすい

<批判・注文>

- ・おもしろかったが、それで何を伝えたかったのかが不明
- ・記憶が継承されているのかについてはよくわからなかった
- ・まとめのようなものもほしかった
- ・自分の歩いている姿をみてみたい
- ・もっと長い距離を体験したい
- ・モデルは真似てるだけ、体全体で昔の日本人の再現をすべき
- ・自分の好きな歩き方をさせたほうがよい
- ・体験は楽しいが、見る資料ももう少し欲しい
- ・工学的説明が欲しい（体型・筋肉など）
- ・人体の構造からみた歩き方も考えて欲しい
- ・持ち物や服装、職業などが歩き方を規定しているのでは、その辺りも見なかった
- ・江戸時代なら階級による違いがあるのでは
- ・一本菌の説明がほしかった
- ・ギャラリートークがあったら
- ・人が多いと体験が困難
- ・結論がわからない
- ・昔の人っていつ頃

多くの方々が、歩きの体験を通して「あるく」ことを意識し、「あるく」ことを考えはじめた姿がうかがえる。「あるくはあまりに日常で意識していなかった」「意識していなかったあるくという動作がゆさぶられた」など「あるく」を意識化するきっかけにはなりえたかと思う。そして「歩くという当たり前のことが研究対象になることを認識」「これからは古い書物や絵を見るときに、どんな歩き方をしているかに気をつけたい」など、新たな資料の存在に出会ったとの声も聞くことができた。ただ、問いかけとして示したかつてのあるき方に多くの方が納得し、ときに変化の理由を跡付けてもいる。展示の持つ力について考えさせられた展示として提示されたものは見る者に結論・真実と理解されやすいことにもっと自覚的であるべきであった。

批判としてはあるき方を捉える視点の単純さが指摘された。階層、職業、服装や履物などあるき方を規定するさまざまな側面に今回はあえて触れずに描かれたあるきに絞ったための当然の指摘であった。また広報をもっとというご指摘が多く、毎日新聞に記事掲載後は「毎日新聞を見て」の来館者が多くみられた。今回は展示に対応した広報のあり方の検討が不十分であったのは確かである。

2-3 展示評価と展示の修正

当初「展示制作途中の市民による評価の導入」を謳い、展示構想案と展示実施案の各段階で評価を行

い修正しながら展示を作り上げていくことを計画していたが、時間的余裕を持たず、最後の展示実施段階のみの評価となった。村井良子氏に依頼し下記の通り実施した。その結果については本書の『「あるく—身体記憶—」は実験展示でありえたか?』を参照されたい。

調査実施日：2007年11月19日(月) 15:00～17:00

調査方法①観察法

調査対象：実際の展示物・手法・環境、および観覧者の行動

調査方法②グループインタビュー

調査対象：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科学生

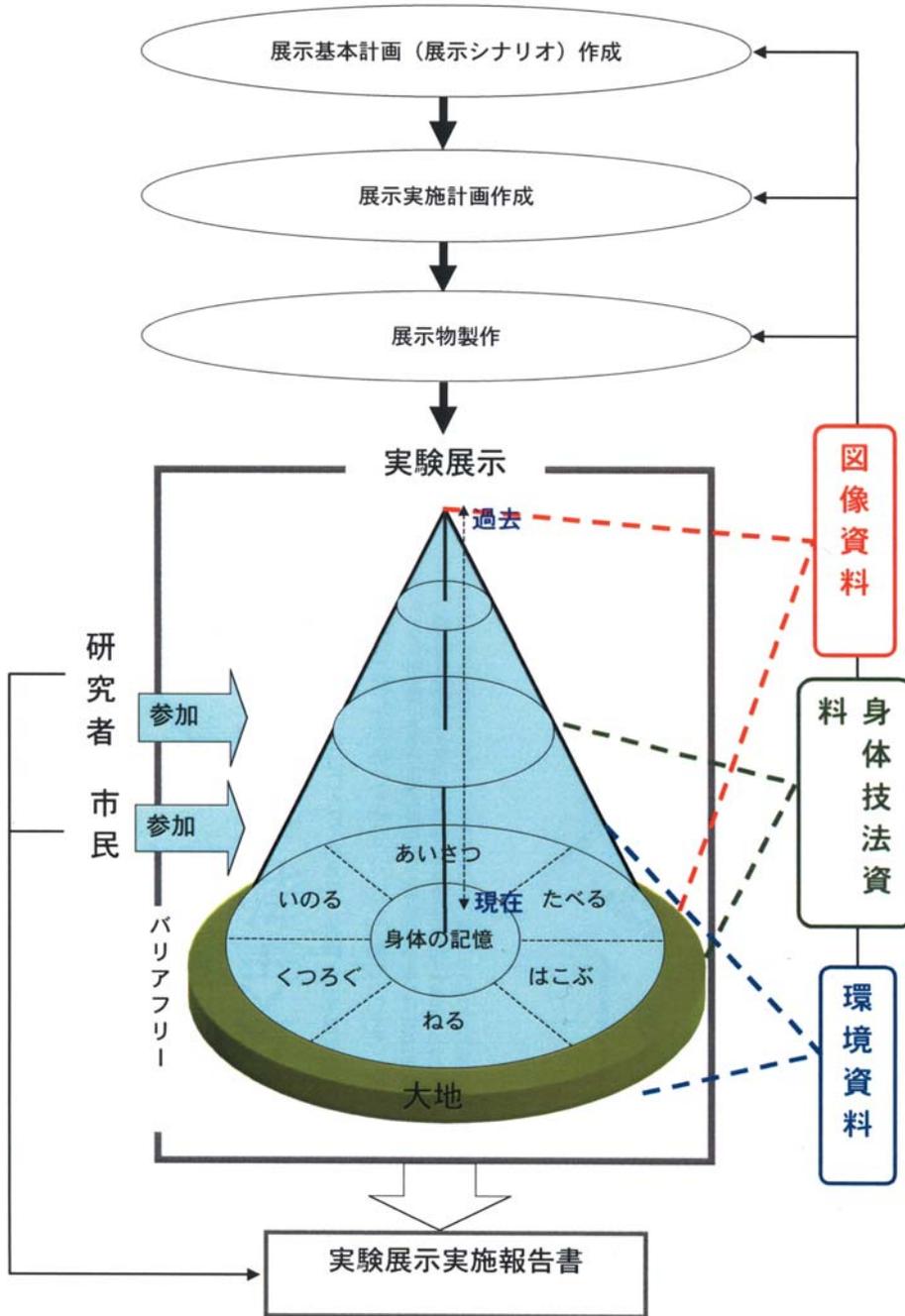
この評価とアンケートの結果をうけて展示の修正について論及していくが、後期開催の2月23日までに映像「身体記憶の発見」に修正を加えた。一つは時間的に長いとの声を受けて体験のプログラムを一つ減らした。もう一つは観覧者への私たちの問いかけが、結論として受け止められたことへの反省から、最後のメッセージを「この展示で想定した、かつての私たちの歩き方は歩きやすかったですか。この感覚は私たちの「身体記憶」につながっているかもしれない」と「想定」と記した上で問いかける形に変更した。もし当初の計画通り構想案、実施案の段階で途中評価をして修正できていたならとの思いを強くすることであった。

(なかむら・ひろこ)

1 展示構想

1-1 展示理念図

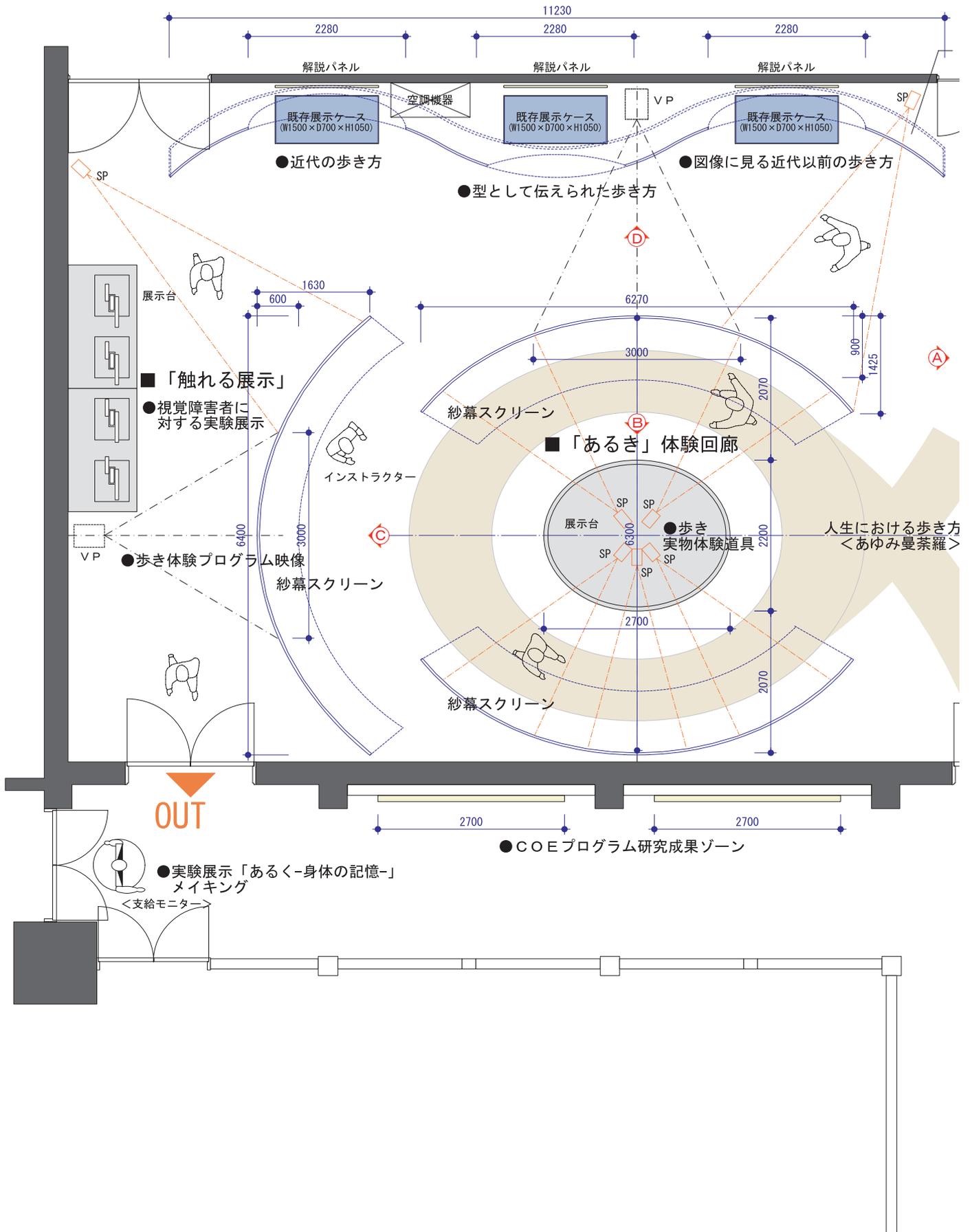
実験展示「身体の記憶－非文字の世界－」構想図

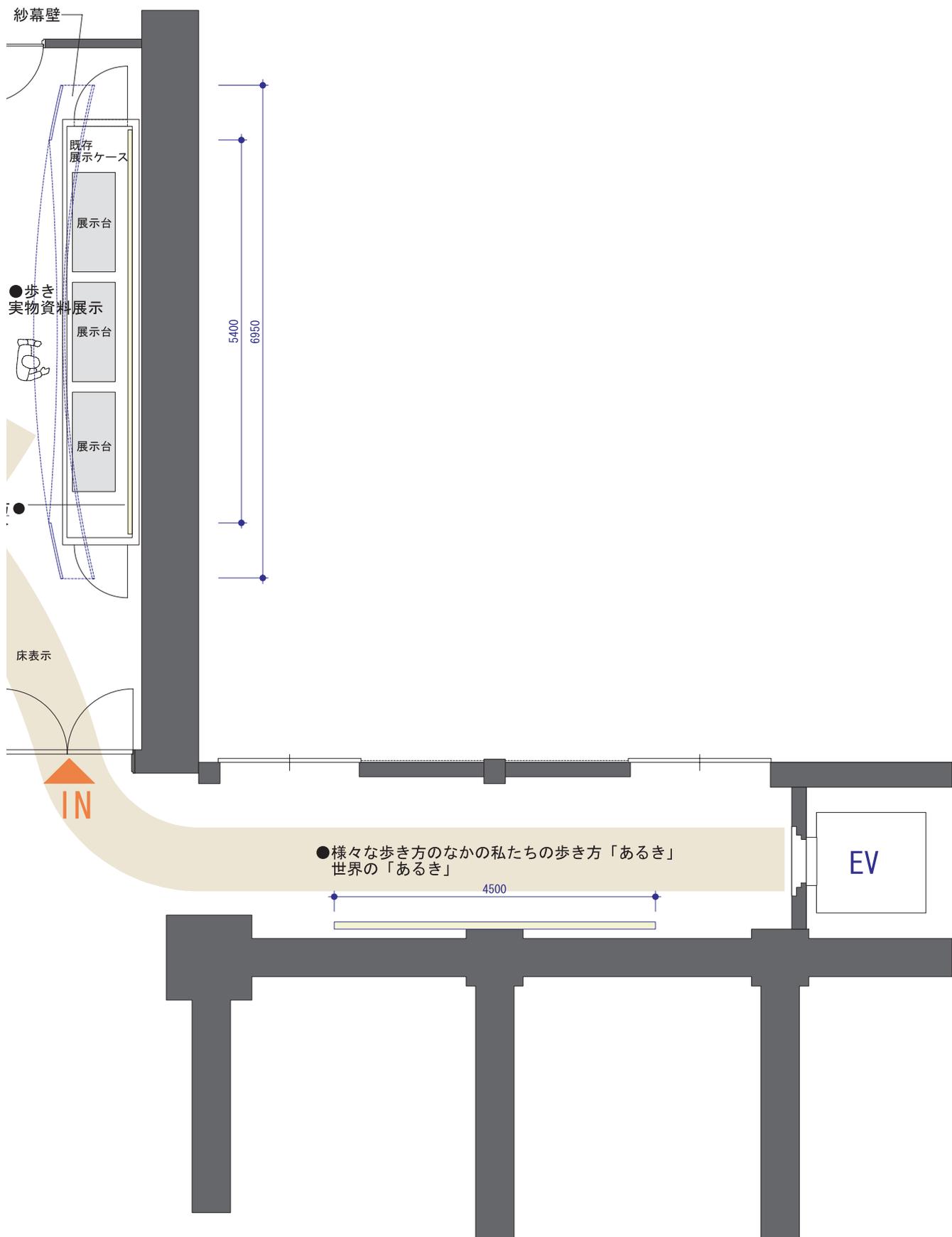


2 展示設計図

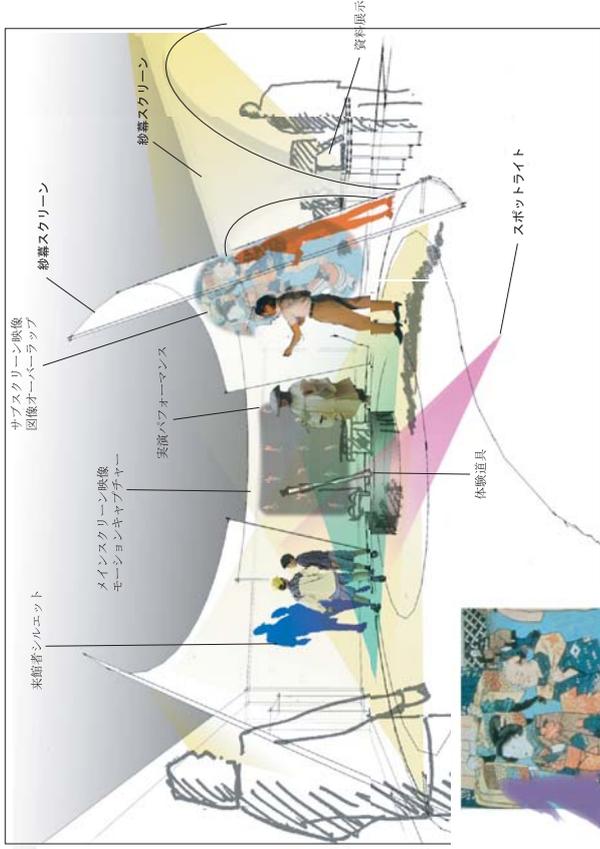
2-1 設計図 I

2-1-1 全体構想図



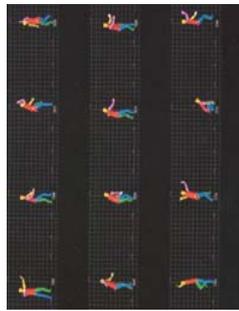


体験回廊イメージ



■プログラムメニュー例

- ・ **画像にみる近代以前の歩き方「あるき」**
ナンバであるか？
裸足で走っていたのか？
子どもは裸足であるか？
草鞋・草履・足半・下駄の使い分けは？
- ・ **型として伝えられた歩き方「あるき」**
舞踏・能（摺り足）日本舞踊（ナンバ）
武道・剣道（摺り足）
- ・ **視覚障害者の歩き方「あるき」**
手を引かれて歩く姿
- ・ **近代の歩き方「あるき」**
行進（軍隊・学校）
行進ができない日本人
靴になれない日本人



モーションキャプチャー

・プロジェクターA

インストラクター実演指導

状況イメージ

おぼろ子・行進曲・舞踏
下駄の音・朝栗りの声など

スポット照明

演技者の影と画像がオーバーラップする

来館者演技

来館者シルエット

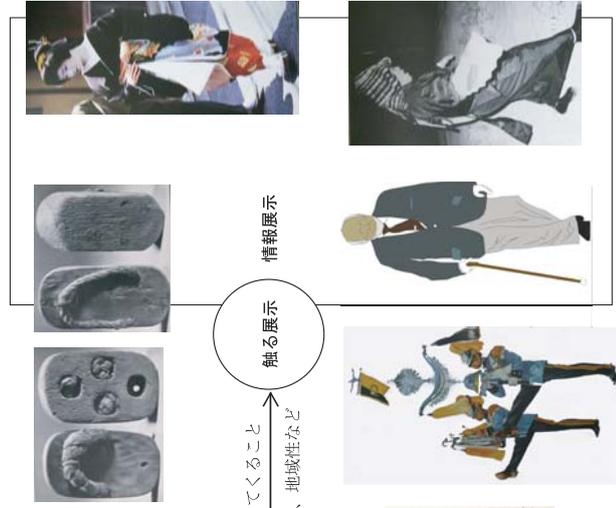
・プロジェクターB

画像

資料から見えてくること
類似性、多様性、地域性など

情報展示

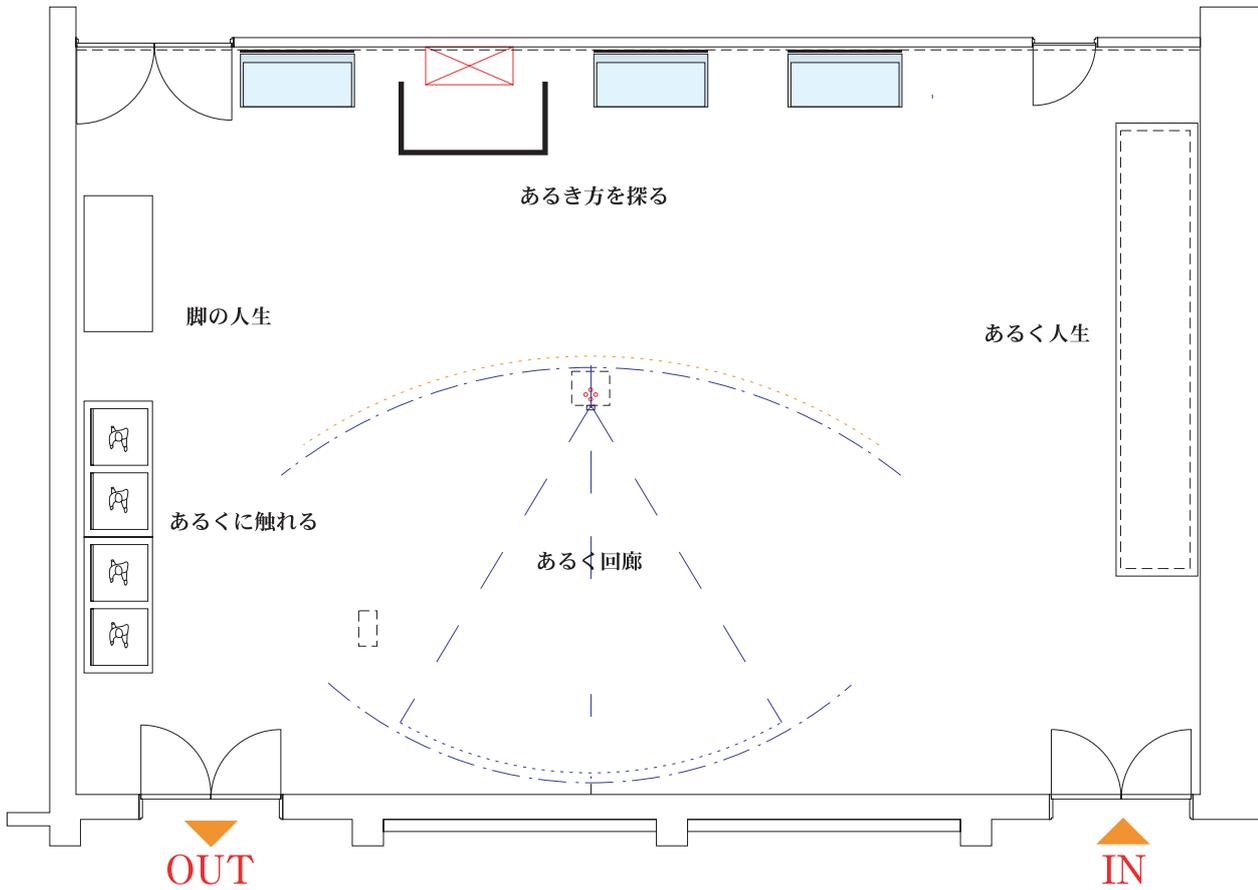
触る展示



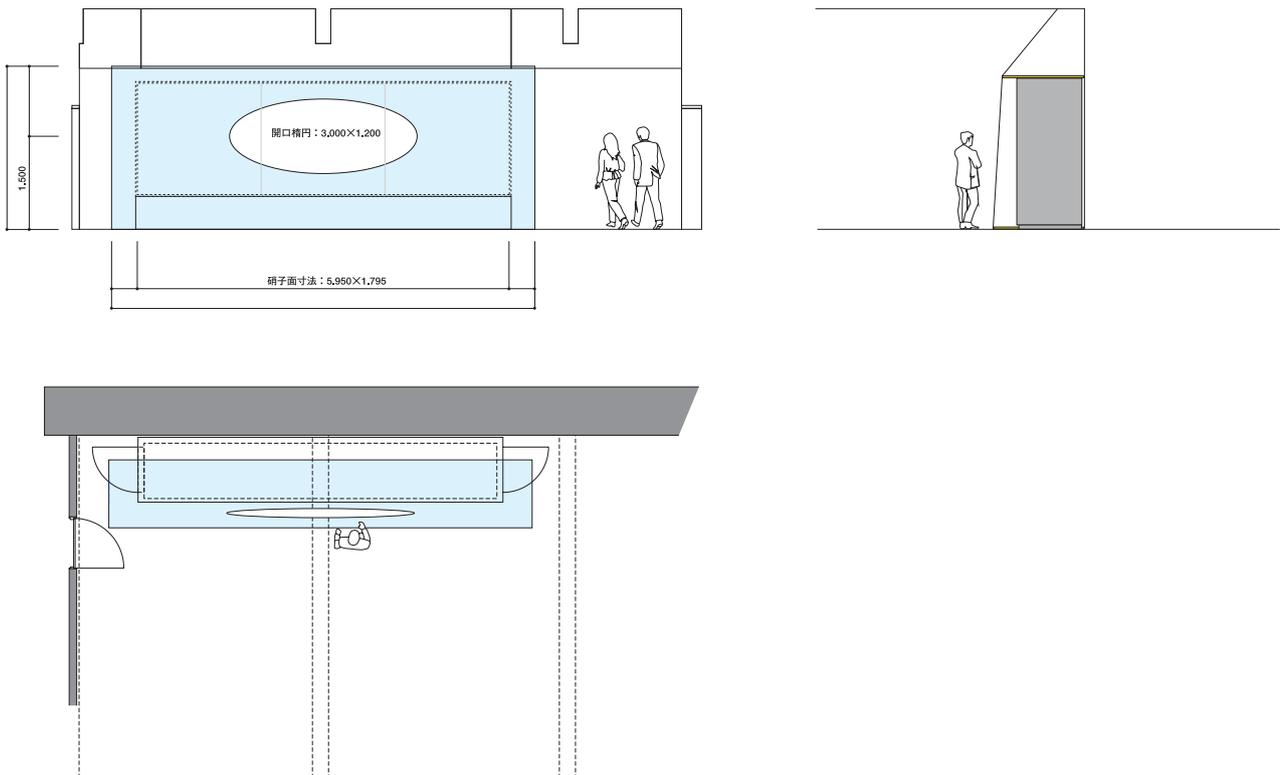
2 展示設計図

2-2 設計図Ⅱ

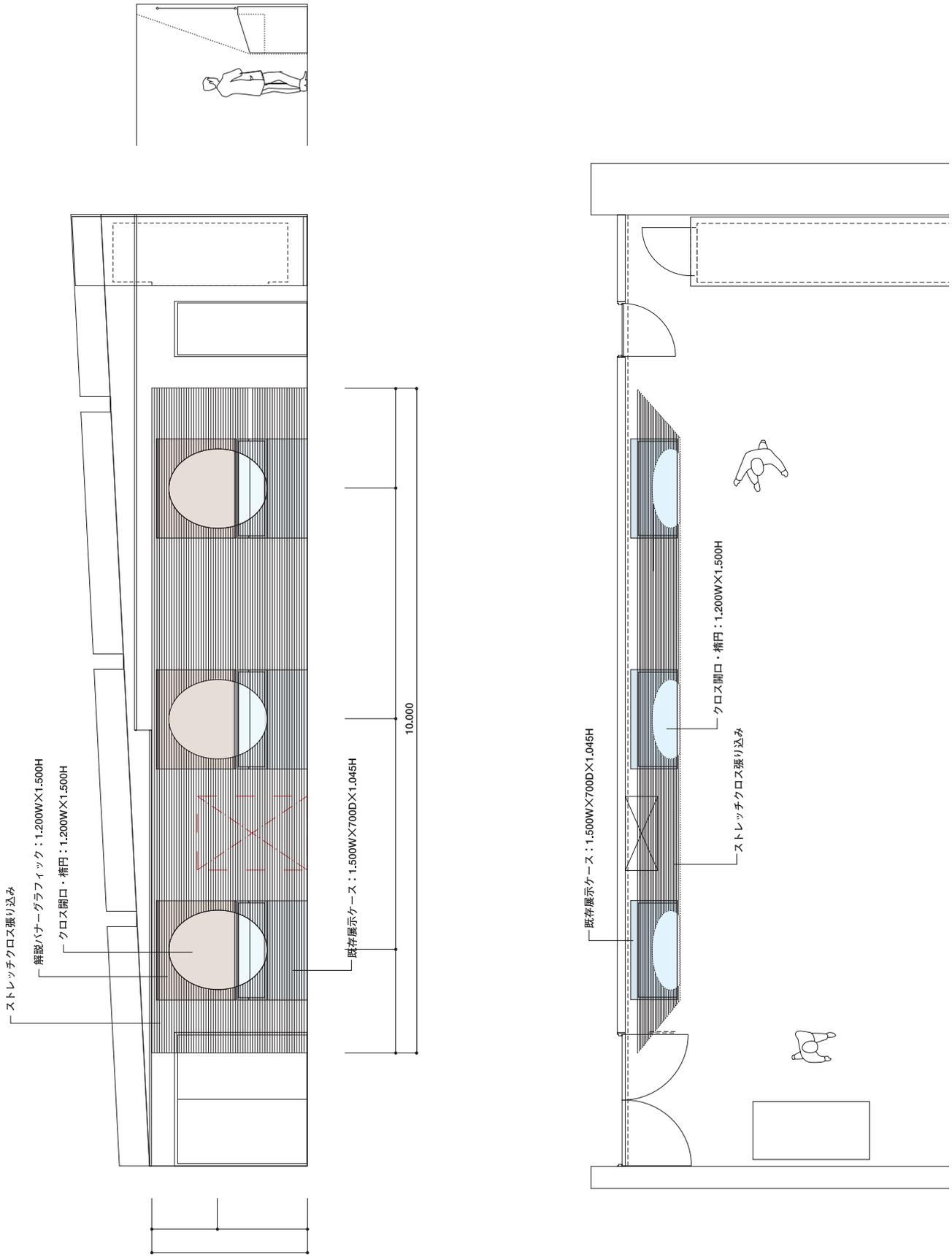
2-2-1 展示場全図



2-2-2 「あるく人生」設計図



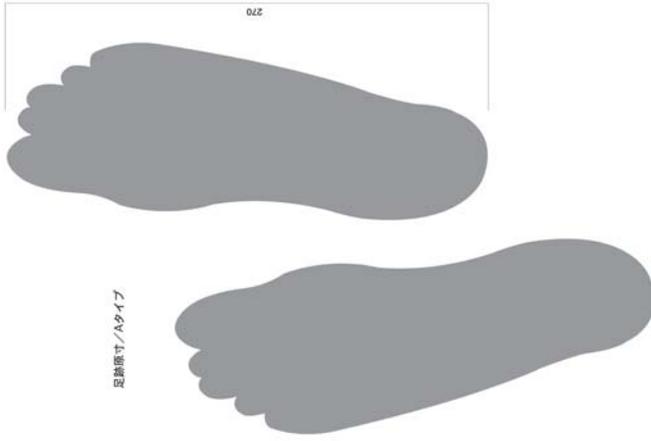
2-2-3 「かつてのあるき方を探る」設計図



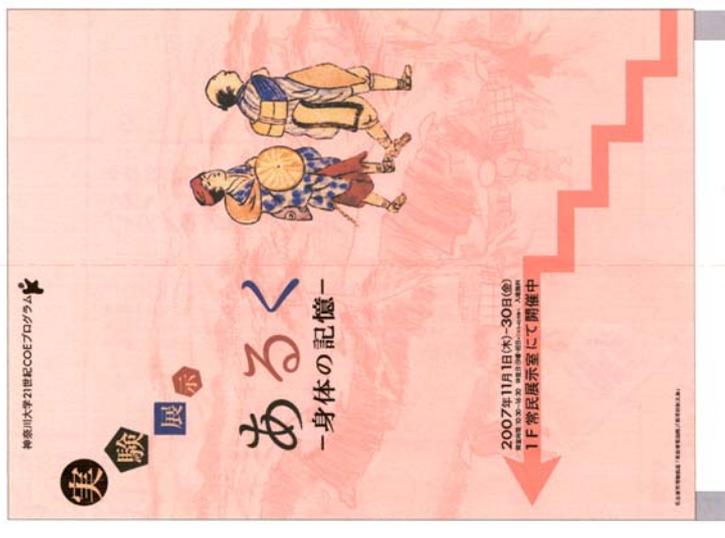
3 パネル・キャプション・印刷物

3-1 パネル・キャプション

3-1-2 足跡パターン



3-1-1 屋外案内板



3-1-3 導入パネル

写真コラージュ案1
W3,500 H1,100
S=1/10



3-1-4 挨拶パネル

LDWV.COM

ご挨拶

神奈川大学は、文部科学省が行った世界的な研究拠点を形成するための21世紀COEプログラムに2008年度に採択され、この5年間研究を推進して参りました。図像、身体技法、舞臺、空間を中心とした様々な非文字事象を資料化し、それを分析して、世界の人類文化研究に提供しようとするのが、私どものプログラムです。6年目となった本年度には、研究成果を様々な方法で発信しつつありますが、その発信方法の一つとして準備を進めて参りましたのが今回の実験展示「あるくー身体の記憶ー」です。

歩くというごく日常的な身体技法を取り上げ、様々な歩き方を図像資料や現在の実際の歩き方を整理検討し、そこに世代を超えて受け継がれた身体の記憶を発掘する仕掛けとしての展示を実験的に組み立てました。展示空間も狭く、展示資料も多くありませんが、私たちの研究成果を、試みとしての展示に結集させる努力をいたしました。じっくりご覧いただき、歩くことについて自覚する機会にしていただくと共に、私どもの21世紀COEプログラムについて理解していただけたことを願っています。

この展示の実施に際してご協力いただいた多くの方々にあつくお礼申し上げます。

2007年11月1日

神奈川大学 21世紀COEプログラム

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」拠点リーダー 福田 アジオ

3-1-5 タイトルパネル

入ロバナー

W1,200 H2,100

S=1/10



「あるくー身体の記憶ー」の実験

実験展示「あるくー身体の記憶ー」は、私たちが日常生活において身に付けているあいさつなどの身体技法が、世代を超えて受け継がれてきたものであることを表現し、身体に記憶された非文字資料の豊かな歴史的な世界をメタセージする。

現在、街中で人々が歩いている様子を見ると、実に様々な歩き方をしていることがわかる。そこには、年齢や性別などによる歩き方の差や、その状況に応じた歩き方のバリエーションの違いがみられる。

さらには、それぞれの歩き方のくせというような個人差がみられる。また、風物や服装などによっても、歩き方に差化がみられる。

日常生活において最も一般的な行為の一つである歩くという行為をテーマとして、歩くことが世代を超えて私たちの身体に伝えられたものである可能性があることを、この展示によって実験してみたい。

3-1-6 「あるく回廊」キャプション

300W×227H

あるく回廊

かつての私たちの歩き方を表す図像資料、映像資料をみてから、実際にかつての歩き方などを体験し、普段の歩き方との違いなどを実感してみよう。



3-1-7 「あるく人生」キャプション

300×240

あるく人生

熊野観心十界図（上半部図像）

熊野寺所蔵（東京都四谷区熊野町）

熊野比丘尼と呼ばれる巫女が絵解きしたとされる熊野観心十界図の上半部の図像である。そこには大きく半田車の輪が描かれ、いわゆる「人生の階段」と推測された出生から死に至る人生が、各世代の歩く姿として描かれている。

熊野観心十界図の下半分には、地獄の様子が描かれている。



※点線枠内部分を印刷

3-1-8 「脚の人生」キャプション

300W×227H

脚の人生

マツダ映画社所蔵・芸術映画社製作

昭和10年前後の製作と推測される無声映画。全編の映像のほとんどが、歩く様子を映している特異な映画で、当時の繁華街や路地裏などで、様々な服装、履物の人たちが歩いている。また、歩くことに腐運して、明治・大正・昭和初期の下駄や草履の変遷を解説している。

3-1-9 「あるくにさわる」キャプション（点字）

150×200H

あるくにさわる

人形を使っかつての歩き方などの歩くフォルムを還元してみた。
そのフォームをさわること、より立体的に歩くことによる身体のあり方を感じ取っていただきたい。

解説バナー左

| W1.500 H1.200

かつてのあるき方をさぐる

型としてのあるく

● 踏み足

茶館や武道の世界では、踏み足という歩く型を指している。それぞれの踏み足の歩き方は、腰を落とす姿勢とし、足裏を全体で着地することを基本としている。

踏み足は、かつての私たちの歩き方を伝えたものであるという指摘がされているが、そのことを示すように、中世から近世の図像資料、1920年代の映像から共通して見出した腰を落として膝を曲げ、小股に歩いている姿とも似ていることがわかる。

● 行進

近代に入り、洋服や靴の普及によって、かつての私たちの歩き方にも影響を与えられたと考えられる。そのなかでも、1885年から兵式体操として普及したとされる行進は、歩調を合わせて歩くことのない私たちの歩み方を合わせて歩くことのない私たちの歩み方であった。行進が行われた当初は、右足を出したときに左手を左手を同時に出すことができず、右足と左手を同時に出す、いわゆるナンバ歩きで行進にならなかったという。

近年、スポーツの世界で注目されている「ナンバ歩き」とは、武道の基本的な姿勢である右足と右足を同時に出す構えであるナンバで歩くことだとされている。右足を出し、右半身を前に出して歩く図像の姿と似ている点が多く指摘されている。



歩兵連隊の行進(大塚、1905年)

3 パネル・キャプション・印刷物

3-2 印刷物

3-2-2 案内葉書



3-2-1 ポスター



神奈川大学21世紀COEプログラム



名古屋造形美術館「展覧会図録」(美術雑誌文庫)

あるくー身体記憶ー

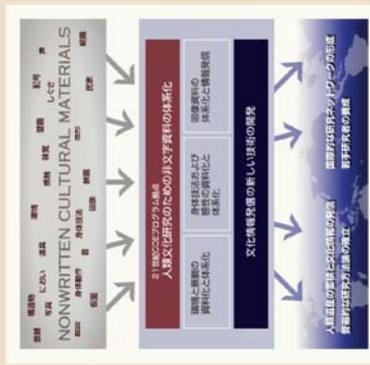
2007年11月1日(木)ー30日(金)
開演時間:10:30ー16:30 休演日:日曜・祝日・11月23日(金)
神奈川大学横浜キャンパスバス3号館 常民参考室

人類文化研究のための非文字資料の体系化

神奈川大学21世紀COEプログラム

2002年度から文部科学省が開始した「21世紀COEプログラム」は、世界的な研究拠点を構築するための大学支援策であり、大学院博士課程を持つ多くの大学がそれに採択されることを目指して競うこととなった。私どもの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は、2003年度に学際・複合・新領域の分野で採択された。実態に当たっては、研究課題にかかわる学内外の多くの研究者に参加を要請し、共に研究に没頭してもらい、目的を達成することにした。

今までの文化研究では文字に記録された事象に専ら関心が集まってきた。しかし、文字に表現されない人間の概念・知識・行為ははるかに幅広く、質量ともに大きい。それは文字で表現された事象とは比較にならない。私たちの事業は、これらのなかから①図像、②身体技法、③環境・景観の三つに絞って、それぞれの事象について資料化する方法を開発し、その結果として資料を蓄積し、蓄積した資料を分析して発信することを目的としたものである。その研究構想を示せば、以下の通りである。



研究成果は、すでに各種の刊行物やホームページで順次公開してきたが、最終年度になる本年度には、その最終成果をデータベースや各種情報のウェブ上の発信という方法で世に問い、また多くの研究成果報告書として刊行することとした。今回の実験展示「あるくー身体記憶ー」は、私どもの研究成果を広く発信する方法として構想され、実施するものである。

神奈川大学21世紀COEプログラム
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1
TEL 045-481-5661 URL <http://www.himaji.jp>

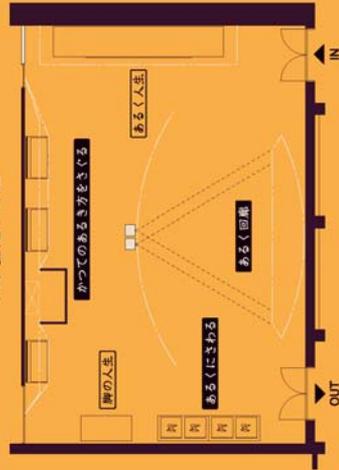
「あるくー身体記憶ー」の実験

実験展示「あるくー身体記憶ー」は、私たちが日常生活において身に付けているあいさつなどの身体技法が、世代を超えて受け継がれてきたものであることを表現し、身体に記憶された非文字資料の豊かな歴史的世界をメッセージする。

現在、街中で人々が歩いている様子を見ると、実に様々な歩き方をしていることがわかる。そこには、年齢や性別などによる歩き方の差や、その状況に応じた歩き方のバリエーションの違いがみられる。さらには、それぞれの歩き方のくせというように個人差がみられる。また、履物や服装などによっても、歩き方に変化がみられる。

日常生活において最も一般的な行為の一つである歩くという行為をテーマとして、歩くことが世代を超えて私たちの身に伝えられたものである可能性を、この展示によって実験してみたい。

展示室見取り図



あるくにさわる
人形を使ってかつての歩き方を再現する。映像資料を見ながら、その歩み方を体験し、その歩み方を再現することによって、歩くという行為の面白さを感じてもらう。

あるく回廊
かつての私たちの歩き方を映像資料、映像資料を見ながら、実際に歩いてみる。その歩み方を体験し、その歩み方を再現することによって、歩くという行為の面白さを感じてもらう。

かつての歩き方をさぐる
かつての私たちの歩き方を映像資料、映像資料を見ながら、その歩み方を体験し、その歩み方を再現することによって、歩くという行為の面白さを感じてもらう。

協力: (財)宮本武蔵記念館 名古屋造形美術館

1、オープニング



身体記憶の発見

2、あるく記憶



神奈川大学 21世紀 COE 実験展示 「あるく-身体記憶-」 展示映像

「身体記憶の発見」

コンテ台本 (最終稿) 2008/02/19

 <p>これは1930年代の人々の歩く姿である</p>	 <p>これは1930年代の人々の歩く姿である</p>	 <p>映像の中のおよそ70から80年前の私たちは、実に様々な歩き方をしている</p>	 <p>映像の中のおよそ70から80年前の私たちは、実に様々な歩き方をしている</p>	 <p>欧米人のように膝を揺って足を伸ばし大股に歩いたり</p>
--	--	--	---	---

2

 <p>欧米人のように膝を揺って足を伸ばし大股に歩いたり</p>	 <p>膝を曲げ膝をあまり揺らずに歩く人もいる</p>	 <p>現在の私たちもおよそ70年から80年前と同じように</p>	 <p>膝を揺って足を伸ばし大股に歩く人もいる</p>	 <p>膝を曲げ膝をあまり揺らずに歩いている人もいる</p>
---	--	--	---	---

3

3、かつての私たちの歩き方を探る

かつての私たちの歩き方の特徴



かつての私たちの歩き方には
いくつかの特徴がある



かつての私たちの歩き方には
いくつかの特徴がある

○腰を落とし膝を曲げて歩く

腰を落とし膝を曲げて歩く



腰を落とし膝を曲げたときの歩き方は

○型として伝えられた歩き方

型として伝えられた歩き方

芸能や武道では、振り足という型としての歩き方が伝えられている



型として伝えられた歩き方

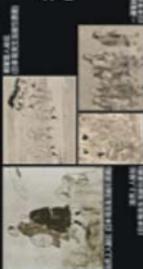
振り足は、かつての腰を落とすし膝を曲げた私たちの歩き方に通じていると考えられる



○右足とともに右半身を出して歩く

右足とともに右半身を出して歩く

右足とともに右半身を出して歩いている姿が中世から近世にかけての絵画に描かれている



右足とともに右半身を出して歩く

なかには右半身を倒いた姿で歩いている人も描かれている



6

○型として伝えられた歩き方

腰を落とすし膝を曲げて歩く

中世から近世にかけて描かれた絵画に多くみられる歩き方である



腰を落とすし膝を曲げて歩く

腰を落とすし膝を曲げて歩く



腰を落とすし膝を曲げて歩く

今でもこのような歩き方をしている人がある



腰を落とすし膝を曲げて歩く

この歩き方は、1930年代の映像のなかにも確認することが出来る



腰を落とすし膝を曲げて歩く

この歩き方は、1930年代の映像のなかにも確認することが出来る



7

52 | 実験展示を記録する

右足とともに右半身を出して歩く

右足とともに右半身を出して歩く

しかし、このような歩きは現在ではみられない

右足とともに右半身を出して歩く

ただし、1930年代の映画にはこの歩き方に似た姿で歩く人がいる

○右足を出したときに右腕を前に振って走る

右足を出したときに右腕を前に振って走る

中世から近世にかけての絵画における走る姿は

右足を出したときに右腕を前に振って走る

右足を出したときに右腕を前に振って走るように多く描かれている

右足を出したときに右腕を前に振って走る

右足を出したときに右腕を前に振って走る

右足を出したときに右腕を前に振って走る

1904年に刊行の「Japan, the Place and the People」に掲載された

右足を出したときに右腕を前に振って走る

飛脚の写真は同じような走る姿である

右足を出したときに右腕を前に振って走る

しかし、このような走り方は現在ではみられない

右足を出したときに右膝を前に振って走る

1930年代の映像の中でも確認できない

○行進

行進

近代的な歩き方の特徴を持つ行進は
1885年から兵式体操として普及してきた

行進

行進

行進

膝を滑らし膝を曲げて歩いていた人や

10

行進

右足とともに右半身を出して歩いていた人には

行進

慣れない新しい歩き方だったと考えられる

○歩き方の体験

かつての私たちの歩き方の体験

○体験への人の流れの説明

次の画にしたがって
歩き方を実際に体験してみましょう

11

映像に合わせて、星に沿って歩いてください



映像に合わせて、星に沿って歩いてください




2. 振り足

映像に合わせて、星に沿って歩いてください




13

黄色の場所まで待機してください



映像に合わせて、星に沿って歩いてください



同じように、反対方向に歩いてください



1. 行進
2. 振り足
3. 星を直上し星を曲げて歩く
4. お尻と肩の間に右手を出して歩く
Type A 半歩を測いた回数資料の表から考えられる歩幅
Type B 半歩を測いた回数資料の歩幅にたいし1930年代の映像の歩幅方
以上5種類の歩みを体験してください

○体敵

1. 行進

12

3. 腰を落とし膝を曲げて歩く

映像に合わせて、腰に沿って歩いてください

14

4. 右足とともに右半身を出して歩く

Type A 半身を開いた図像資料の姿から考えられる歩き方

映像に合わせて、腰に沿って歩いてください

15



協力 (財)京本記念財団
 名古屋小神学園
 関係 特人「京東部」部中委員会
 神奈川大学 大学実行協議会
 神奈川大学学生会
 神奈川大学 21 世紀COE



Type B 半身を開いた図像資料の歩き方に近い
 1930年代の映像の歩き方



5 記録写真

5-1 展示をつくる



映像「身体の記憶の発見」の撮影



映像「身体の記憶の発見」の撮影



「あるく回廊」紗幕の組立



「あるく回廊」の映像と照明の調整



入口パネルの位置決め



「あるく人生」製作途中

5-2 展示へ誘う



大学正面の垂れ幕



展示場入口の看板



建物入口から展示場入口に続く足跡パターン



エレベーター前のパネル



エレベーターから展示場入口まで続く足跡パターン



入口のタイトルパネルと「あるく回廊」

5 記録写真

5-3 展示「あるく回廊」「かつてのあるき方をさぐる」



「あるく回廊」で歩き方を体験する



「あるく回廊」で映像を見る



「かつてのあるき方をさぐる」

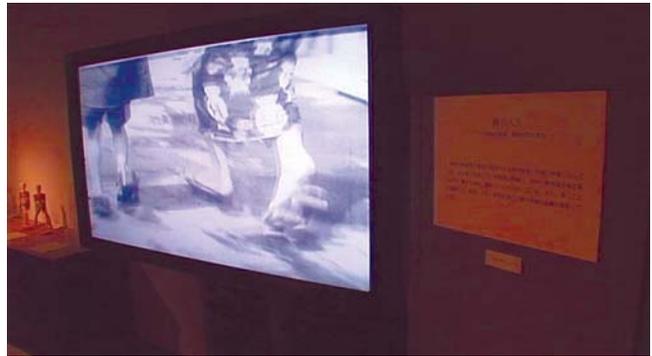


紗幕スクリーンの中のパネルと展示ケース

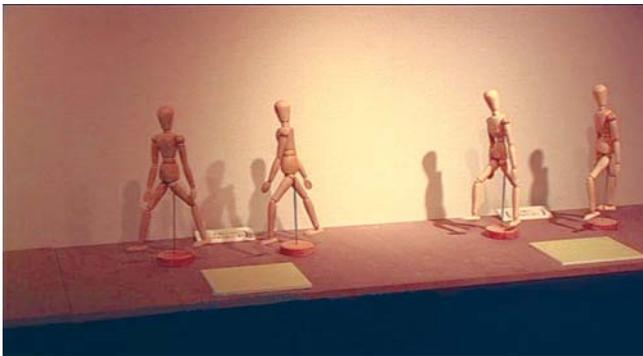
5-4 展示「あるく人生」「あるくにさわる」「はきかえて歩いてみよう」



「あるく人生」



「脚の人生」の上映



「あるくにさわる」



「あるくにさわる」



「はきかえて歩いてみよう」



「はきかえて歩いてみよう」一本歯で歩く



実験展示を評価する

「あるく—身体の記録—」は 実験展示でありえたか

村井 良子

本稿では、実験展示を2つの観点から検証したい。ひとつは、実験展示班が試みた行為について、ねらいが先進的・独創的であったか、展示手法や研究のアプローチやフレームワークの設定が妥当であったか等の観点から検証をしたいと思う。ふたつめは、実験展示の機能やしぐみについて、有効性・妥当性・先進性等の観点から検証を行いたい。

I 試みを検証する

(1) — テーマ設定の試み

本実験展示では、非文字資料（テーマ）をあえて非文字資料（手段・手法）を用いて表現することにチャレンジしている。その試みは、これまでにないアプローチであり、取り組み自体、先進的かつ独創的であり、まさしく実験的と言えよう。

当初は、食べる、洗う、運ぶ等の日常無意識に行っている行為（身体技法）があがっていたが、最終的には「あるく」という難しいテーマが選定された。前者の日常行為であれば、道具を使うために地域性や文化面が表現しやすいと言える。しかし、「あるく」は道具を使わない日常行為であるため、物証資料が少ない条件下で展示を行わなければならない。こうした条件であることを理解した上で、敢えて展示テーマに設定したことに対しては評価したい。

「あるく」は一般にとって珍しいテーマであったため、興味深く見学する人が多かった。しかし、アンケート結果を見ると、観覧者は実験展示を見て、「あるく」がテーマであることは認識できても、「あるく＝非文字資料」と意識できる人がいなかったことから、展示のねらいのひとつとしてあがっていた

「非文字資料の発見」は達成できていなかったと言えよう。ねらいを達成させたかったのであれば、展示する側の意図をもっと明確に伝える努力が必要だったと言える。

(2) — 画像資料のみでアプローチの試み

通常、「あるく」をテーマにする場合、生物学的・生理学的なアプローチから入ることが多いのではないだろうか。例えば、運動を学習・記憶する小脳の働きや、四つ足から二足歩行への生物学的な進化（道具を使うことによってサルから人類への進化）等をあげることができる。また、本実験展示では、「あるく」姿を規定する文化的・環境的な要因に関する説明（例えば、生活様式、服装、道具、生業等に関する歴史的・地域的な解説や物証資料の展示）を施すことが多いと思われる。しかし、本実験展示では、こうしたアプローチを極力しないようしている。

こうしたアプローチ・資料構成のため、本実験展示は、研究成果として「非文字資料の画像や映像からひも解いたかつての歩くかたち」を示すにとどまっている。

また、研究プロセス（研究者の思考の回路）を観覧者に共有してもらいたいというアプローチが実験展示班にはあったが、実際には研究資料を展示するだけで、研究の途中で生まれた疑問を示していなかったために、残念ながらこのねらいは達成できていなかったと言えよう。

こうした結果から、画像資料のみだけでは、ねらいの達成は難しかったと言えるのではないか。本実験展示のアプローチ、研究対象の領域や資料構成の選定は、果して妥当であったのかは疑問が残る。今

後、研究領域を広げる等して、ねらいが達成できるよう、実験展示をさらに高める努力をしていただきたいと思います。

(3) ——仮説を展示するという試み

本実験展示は、「かつての歩き方が身体に記憶されている」という仮説を展示しているものだ。しかし残念ながら、そのことは観覧者に伝わっていなかったとアンケート結果から言える。特に若い世代の中には、仮説ではなく実証されたことと誤解をしてしまう人もいた。これは、一般的にミュージアムや大学の展示は実証された研究成果や結果の公開の場という認識があることに起因しているとも言えるが、展示する側としては、誤解が生まれないよう十分に配慮すべきだったと言える。

今回、情報の送り手として、仮説であることを明確に伝える義務を怠ったことは問題ではなからうか。仮説を展示したことを入口に明示すべきであったと思う(図1)。併せて、一緒に考えるための実験場であることも入口で伝え、参加を促すことも必要であったと思う。

(4) ——展示開発プロセスの試み

近年、展示を企画・制作する場合、観覧者のター



図1 義務として、入口に展示のねらいや位置づけを明示

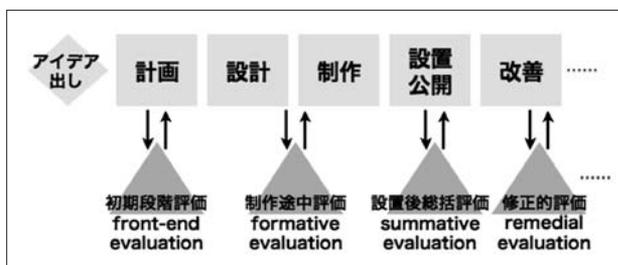


図2 展示開発プロセスにおけるエヴァリエーション

ゲットを設定し、そのターゲットに対して有効な方法を検討・決定するために、かつ無駄な展示物を作らないために、エヴァリエーション (evaluation: 展示評価・検証、PDCA マネジメントサイクルの check にあたるプロセス、図2) を導入するケースが増えてきている。

今回の実験展示も、様々な試みを行うことを予定していたため、ターゲットである学生・教員・市民・研究者を対象に、2006年度からエヴァリエーションの実施が計画されていたが、実現には至らなかった。本実験展示をつくる過程も研究対象としていたため、必要不可欠のプロセスだったと言えるので、設置前にできなかったことは大変残念と言えよう。

しかし、設置後(2007年11月の会期中)行ったエヴァリエーションを経て一部改善(図3)をし、2008年2月のシンポジウムをむかえているので、修

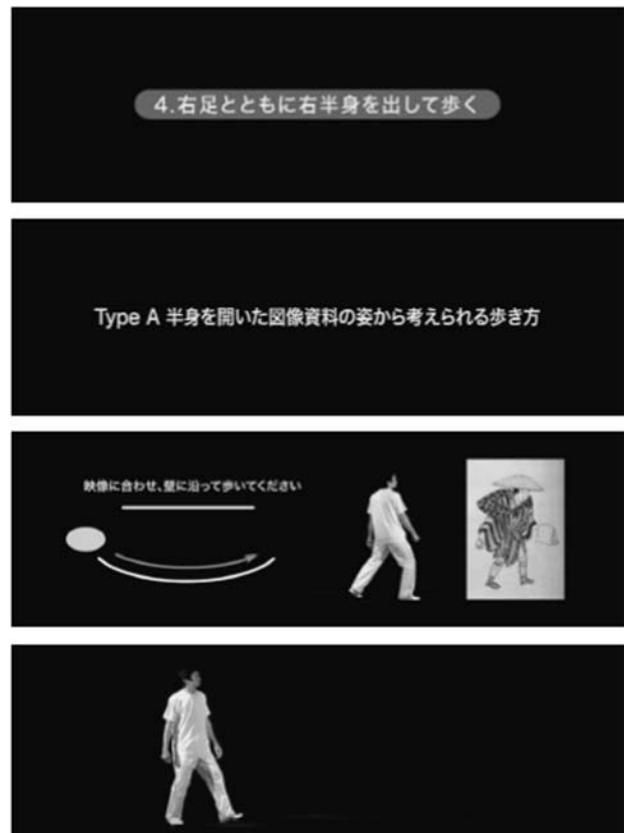


図3 改善例

図像から想定した歩き方の提示。しかし、体験者は実際過去にこうした歩き方をしていたと誤解する場面も見られたため、あえて図像の通り、体験してもらっていることを映像内のテロップに明示し、インストラクターも説明を加えるように改善した。

正的評価は実施したと言える。また、11月の公開を制作途中と位置づければ、制作途中評価を実施したとも言える。

確かに理想的なプロセスは踏めなかったが、有効な展示をつくるためにエヴァリエーションのプロセスを組み込んだ姿勢や方向性は評価できる。

今回の展示は研究者だけで構築されたものため、ねらいやメッセージが観覧者に伝えきれていないことも多々見受けられた。この点を改善するためにも、本実験展示を完成形のための一プロセスと捉え、バージョンアップしていくことを検討していただきたい。

(5) —— 研究成果発信装置としての試み

展示という手法は、多くの人に研究成果を直接発信する装置として有効であったと言えよう。これは、アンケートやグループインタビュー等からわかるように、老若男女が本実験展示に興味を持ったことがわかる。特に身体技法を伝える場合、研究論文を文字で伝えるよりも、体験型展示は有効な手法と言える。

また、展示はつくる過程でも公開中でも、観覧者とのコミュニケーションによって新たな研究の視点を獲得できる手法でありえるとも言える。展示は、共有の場をつくりやすいメディアであることから、研究のための実験場として機能できる可能性が高い。その機能を生かすためには、展示室でのディスカッションや展示改善ワークショップ等を実施すべきだったと言えよう。

II 展示を検証する

(1) —— 展示意図は伝わったか

観覧者への調査（質問紙によるアンケート、グループインタビュー、行動観察）によって、下記のようなことがわかった。

まず、第一段階のねらい「観覧者の歩くという行為に対する興味を喚起する」は達成できたと言えよう。第二段階のねらい「歴史軸で、歩くことを意識

化する」も、観覧者のおおよそ半数の人が達成できたと推定できる。第三段階のねらいである「誰もが非文字資料（身体技法）を内に持っていることを発見」に関しては、調査結果からだけ見ると、観覧者をこのレベルにまで導けていないことがわかる。

観覧者の中には、もの足りなさや中途半端な印象を持ったり、展示内容に疑問を持ったり、展示内容よりも高次の情報を求める傾向の人も見られた。自分なりに、歩き方を規定する文化的な要因等を考える人もいた。こうした観覧者の消化不良の思いは、展示の現場で研究者や実験展示班とのディスカッションによってすくい上げ、展示改善や研究へとフィードバックしていくことが望ましいと言えよう。

今回伝えたいメッセージを、青木氏の記録から、改めて確認してみよう。

「私たちの「歩く」という行為が近代化等の影響から変化しながらも、世代を超えて私たちの身体に伝えられてきた可能性があることを示す。」

「現代の私の歩く姿が、世界的に見て普遍的なものではないこと、時間軸のなかで様々な状況で変化して現代的な歩き方になってきたこと。変化しながらも、かつての歩き方が身体に「記憶」されている。」（下線は筆者）

上記のメッセージを伝えたいのであれば、地域差や、変化の要因となった様々な分野の事物も研究対象にし、展示すべきであったと思うが、本展示は図像資料にこだわりすぎて、「歩く」形が展示の中心になってしまっている。

このことから、達成したい目標、およびそれを伝えるための展示構成や資料の選定が妥当であったかを検討し直す必要があると思われる。今後継続するのであれば、この大前提に戻って、検討していただきたい。

(2) —— 展示手法は妥当だったか

見るだけでなく、体験できる場をつくったことによって、観覧者の身体感覚に直接訴えかけることができた。「身体技法」を伝える手法として、有効な手段の選定であったと言えよう。また、体験型展示は、歩きやすい、無理がある、あり得ない等を実感

でき判断できるため、仮説検証のための展示手法としても有効であったと思う。

体験展示「あるく回廊」にインストラクターを配置させることによって、身体技法の「伝承」の場として成立していたのではないと思う。また、インストラクターが体験者ひとりひとりの年齢や状況等に応じて対応できるので、観覧者の身体を自覚させるきっかけを作り出しやすい環境にもなり得ていた



図4 図5 伝承者であり、コミュニケーターでもあるインストラクター



図6 図7 「はきかえて歩いてみよう」の体験コーナー

と思う。(図4、5)

「あるく回廊」の他に、「はきかえて歩いてみよう」の体験コーナーも、「歩く」姿が形作られていく要因等を自身で考える場として有効に機能していた。一本歯の下駄をはいてみて、はじめてすり足やかつての歩き方が理解できたと言う感想もアンケートに見られた。(図6、7)

その他、展示手法に関して、いくつか問題点が見られたが、これらはすぐに改善ができることなので、本文での説明は省く。図8～11参照。

(3) ——インタラクティブでありえたか

展示は、もともと双方向からの働きがあって成立するコミュニケーション・メディアである(図12)。



図8 「あるくに触る」コーナーの展示は、展示台が低いために大人では触りづらい。

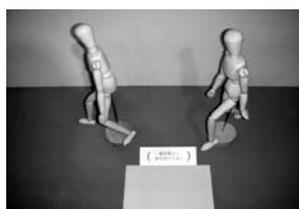


図9 展示台が低いため、モデルの歩く姿を横から観察できない。



図10 中腰になって、真横からモデルを見た場合。



図11 展示造作デザインの問題点
白い布で覆って見てもらいたいものを絞り込む手法を採用。そのため、影や死角ができて、見づらいという感想も多かった。

つまり極端な言い方をすれば、一方的に情報を発信するメディアは、展示とは言えないということである。こうした認識のもとに、展示を開発することが重要と筆者は考えている。

情報の送り手側に伝えたいメッセージがあり、それを伝えるため展示はつくられる。より効果的にメッセージが伝わる展示手法を決定するために試作品等をつくり、エヴァリエーションを行い、バージョンアップをしていく。また展示からの働きかけによって生まれる利用者のリアクションは様々で、情報の送り手側（展示開発者）が想定していた通りにはなかなかいかないものである。このブレを少なくするためにも、エヴァリエーションは重要な役割を担っている。

本実験展示は、「あるく」体験とインストラクターの働きかけによって、インタラクティブ（双方向）な展示環境を作り出すことに成功していると思う。

また、研究や展示開発へのフィードバック情報を得るために、会期中に、質問紙によるアンケート（回収数60件、図13）、グループインタビュー（観覧した学生を対象に1回、図14）を実施し、インストラクターノート（利用者の代弁者として記録）からの情報も加えて、利用者の反応を分析し、専門家

によるレビューも行い、研究や展示改善に生かす努力を怠らなかった。そのため、本実験展示の会期中は、図15のようなインタラクティブ（双方向）な関係性が成立していたと言えよう。

Ⅲ 今後に向けて（提言）

(1) ——非文字資料による実験展示の意義

身体技法を伝える手段・資料として、非文字資料にこだわり、文字を使わないという当初の計画の実験性に強く引かれ、本研究に協力するようになったことを思い出す（その後、残念ながら文字は使うことに計画変更）。

また、人体モデルによる展示は、もともと視覚障害者も体験できるようにとの配慮から検討されてきたものだった。

非文字資料の展示は、本来はバリアフリー、ユニバーサルデザインへの挑戦であり、展示の大きな目標は、共生の世界の実現を達成させることだと個人的には思っている。ぜひ、そうした観点で、再度、実験展示に取り組んでいただきたい。そこで、筆者

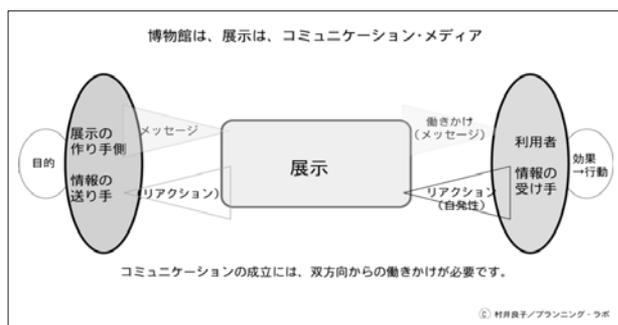


図12 展示のしくみ



図14 学生対象に実施したグループインタビュー



図13 廊下に置かれたアンケート用紙

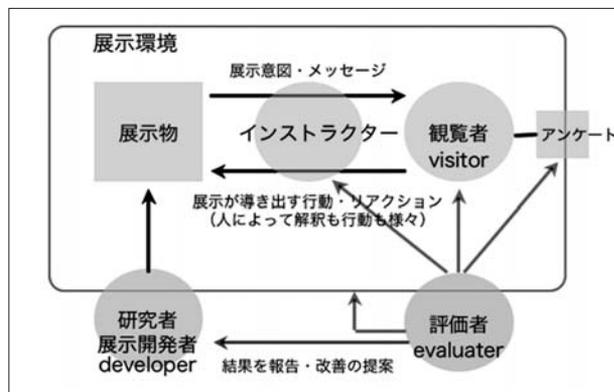


図15 本実験展示における関係性



図16 図17 パリ下水道博物館 映像展示

が「非文字資料による実験展示」と考えている例を2つ紹介して終わりたい。

ひとつは、パリの下水道博物館（Musée des Egouts de Paris）にある映像展示（図16、図17）。この映像は、言葉（文字・声）による説明はまったくなく、動画と静止画、音楽、下水道の音等で作られている。パリは世界中から観光客が集まる都市で

ある。そのため、言語によるバリアを取り払った展示が必要な環境とも言えるが、言葉なしでも十分に理解できる質の高い展示だったと思う（1995年見学時）。

もうひとつの「非文字資料による実験展示」例は、Dialogue in the Dark。このプログラムは、7名1グループにアテンドがひとりついて、暗闇の展示環境を探索するというもの。アテンドは全盲の方。この体験を通して、様々な感覚が覚醒し、外界の刺激を敏感に感じ取ることができる。視覚障害者の立場の理解にも役立つプログラムである。日本でも開催されているが、ドイツ等世界中の様々な都市でも開催されている。

(2) ——結びにかえて

COEプログラムは今年度で終了するが、この実験展示を成長発展させるために、ぜひ今後も継続して研究を続けていただきたい。

神奈川大学の研究という行為のDNAの中に、展示という研究の実験場を「場の記憶」として、そして開発するプロセスを「からだの記憶」としてとどめていただきたい。

（むらい・よしこ）

写真提供：図1, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 11, 13, 14は実験展示班より提供／図9, 10, 16, 17は筆者／作図：図2, 12, 15は筆者
 ※本文は2008年2月24日に開催された第3回神奈川大学COE国際シンポジウム「非文字資料研究の新地平」セッションV「身体技法を展示する」におけるコメントを原稿化していただいたものである。

実験展示「あるくー身体の記憶ー」の課題

—「展示の無限階梯」への旅立ちへのはなむけとして—

笹原 亮二

「身体技法」を展示するという試み

神奈川大学COEプログラムの一環で行われた実験展示「あるくー身体の記憶ー」展は、「非文字資料のひとつである身体技法を展示する」（中村2008:77）という困難な課題に果敢に取り組んだ試みであった。しかも、観覧者の多くが、自ら体を動かすことを通して、「あるく」という日常的な行為が一種の身体技法であるという事実を改めて意識するに至った（中村ひろ子氏のご教示による）ことは、この展示が目指した、「観覧者ひとりひとりが所有するものでありながら所有が意識されていないことが多い」非文字資料としての身体技法を「身体化された記憶を展示を通して意識化する」「非文字資料の発見」（中村2008:77）という目的が、ある程度達成されたことを示している。

こうした点を考慮すると、今回の展示に対して、基本的には最大限の敬意と肯定的な評価が与えられるべきであろう。その上で、今後そうした展示の試みを更に進めていく際に、検討を希望する問題をいくつか提起することで、この展示の評価という私に課せられた責任を果たしたい。

日常的な行為に潜む身体技法を意識化させる 展示「技法」としての現実的な汎用性

自らの身体性の自覚や再認識を目指した今回の展示は、「文化や伝統とよばれ」、「われわれの生き方を根っこのほうで方向づける生活原理でありながら、外部に向けて自称することの決してない場所」として存在する「つねに意識未満の状態におかれた奇妙な領域」を「民俗」と名付けて（関2002:41）論じてきた民俗学の視角に通じるものであり、それ

がある程度達成されたということは、民俗学を学んでいる私にとって、その意味でも意義深いものであった。

しかし、今回の展示が博物館などの展示「技法」として、どれ程の汎用性を持ち得るかについては議論の余地がある。今回の展示のある程度の成功は、展示のための理想的な映像の作成と使用、また、その効果的な運用を可能とした展示の意匠の洗練度や完成度の高さに拠る部分が少なくないと思われるが、そうした状況の実現のための経済的・人間的な条件の充足が極めて困難なことは、実際の展示制作の現場を想起すれば即座に納得できる。

私の勤務する国立民族学博物館（以下、民博と表記）では、休憩コーナーに世界各地の椅子や寝台を置いている。そこでは実際に座ってみることで、身体的な快適さの感覚に地域や文化毎の相違が存在していることを身をもって知ることができるが、設置の簡便さなどを考慮すると、身体技法の展示「技法」として、今回の展示よりも高い汎用性を有しているとはいえないか。

展示の観覧の強制性と日常的な行為実践という 個人的な体験を巡る主体性

今回の展示と民博の椅子との比較は、展示の観覧者の主体性の在処という問題も顕在化させる。今回の展示で主要な部分を構成していた映像と観覧者の体験という技法は、展示する側が一方向的に設えた、時間的・空間的に固定された同一の形式的なプログラムに従うことを観覧者に要求し、観覧者の選択の余地が極めて少ないという意味で、一定の強制性を有していると見ることもできる。日常的な身体技法は、確かに「生き方を根っこのほうで方向づける生

活原理」としてある種の強制性を有する。しかし、人々は年齢性別や境遇の違いに応じて、物事の行い方や感じ方が微妙に異なることも事実である。個人への注目は、民俗学が、「郷土人の個々の小さき拳動表現、内部感覚の中にも、必ず歴史の痕跡」や「残つてゐる何等かの生活の特徴があり」（柳田 1970b:276-277）、そこから歴史を「各自の郷土に於て、もしくは郷土人の意識感覚を透して、新たに学び識らうとする」（柳田 1970a:67）と、個人への主体性に注目してきたことにも通じる。日常的な身体技法の習得や行使が究極的には個人的な実践であることを考えると、観覧者個々の主体性を制限しきれない展示における強制性の存在は、看過できないのではないだろうか。

そうすると、個人が好きな時に好きなだけ、好きな姿勢で身を任せることが許される民博の休憩コーナーの椅子も、「ローテク」の展示ではあるが、「ハイテク・ハイセンス」の展示に必ずしも劣っているとはいえないと考えるのは、単なる身びいきであろうか。

映像技術の進歩は身体技法の 捕捉・提示を巡る問題を解消し得るか？

高度な映像技術を駆使した今回の展示と民博の椅子の比較は、映像技術の進歩は身体技法の捕捉・提示を巡る諸問題を解消し得るかという、更にもう一つの問題を惹起する。

身体技法の一つである芸能を精密に捕捉し、提示しようとする民俗学の試みは、既に戦前に存在した。戦前、日本青年館の「郷土舞踊と民謡の会」に出演した角館の「^{おやま}飾山囃子」に対し、民俗芸術の会の研究者らが調査を行い、文字表現と共に図・写真・楽譜などを駆使し、一定の形式的な身体の動きとして捕捉と提示を試みた（民俗芸術の会 1932）。そこで注目されるのは、「汗の結晶ではあるが、最完全なものとは言へない」（民俗芸術の会 1932:3）・「殆ど徒勞に近い仕事」（竹内 1932:23）・「不明の処が多く」「これ以上には、全く何ともしかたがない」（兼常 1932:32）といった、対象を十分に捉えきれないという否定的な見解が表明されていたことであ

る。こうした彼らの物言いからは、捕捉や提示の技術や実践が精密さを増せば増す程、「何をどのように理解したらそれを理解したことになるのか、何をどのように記述したらそれを記述したことになるのか」（笹原 2003:299）がより先鋭に問われるようになったという、逆説的な状況が浮かび上がってくる。

そうした問いは、ビデオという高度な身体技法の捕捉・提示の技術の使用が日常的になった現在、最早解決したのであろうか。私にはそうは思えない。今回の展示においても、その問いは相変わらず存在しているのではないだろうか。

芸能（身体技法）の輪郭をいかに確定するか

その問いは、換言すれば、身体の動き自体をいかに精確・厳密に捕捉し、再現し得たとしても、それでその芸能（身体技法）を捕捉し、再現したことになるかということになる。

日本における芸能の研究に芸態論と環境論という大きな二つの流れが存在することも、その問いが常に芸能研究において課題とされてきたことを示している。芸態論とは、芸態、即ち演じられる演技そのもの・芸能の表現それ自体を主たる研究の対象とする立場で、民俗芸能研究・演劇学を基盤とする。一方、環境論とは、芸能を巡る歴史的社会的環境に注目し、それぞれの芸能の歴史的 position 付けや伝播を明らかにすることを第一の目的とする立場で、文化史・社会史を基盤とする。しかし、両者は二者択一ではなく、主にどちらに軸足を置くかという問題であり、実際は両者を両極として、その間の適切な位置から、両者を視野に収めつつより妥当性の高い芸能の理解や認識の実現が試みられてきた。それは、差しあたりいかにその芸能（身体技法）の輪郭を確定するかということであったといえるが、そうした試みが常に環境論（芸能史的研究）と深く関わっていることを考えただけでも、その輪郭の確定が如何に容易ではないかが理解されてくる。芸能とは基本的に歴史的な存在であり、歴史的社会的環境との関わりにおいて絶えず変化してきたので、歴史的社会的な枠組みや文脈をどのように設定するかによって、把握すべき芸態の様相は異なってくる。

伝承の過程としての芸能（身体技法）あるいは歴史の中のからだ

そうした芸能や芸能研究のあり方を踏まえて、私はかつて、民俗芸能を前例の単純な繰り返しではなく、現地の様々な出来事の発生や様々な人々の関与の中で、芸態や造形や心意など、「様々な側面において内容に変化を来しつつ再創造されて、結果として上演が実現され、それが繰り返されていくこと」（笹原 2003:304）と規定した。つまり、「からだは」元来「たいそう貧弱な骨組」で、そこに「歴史・文化という肉付きがほどこされるとき、ほんとうのからだになる」のであり、「人体の歴史的・文化的外化」としての「歴史のなかのからだは、それぞれの文化が持つシステムのちがいに応じて、たいそうことなつた意味をもっている」（樺山1987:8）というわけである。

芸能（身体技法）の理解に、歴史的な伝承の過程において不斷に変化してきた「歴史のなかのからだ」という見方、即ち身体の動きを一定の歴史的文化的環境とともに把握することが不可欠であるならば、今回の展示で示された「あるく」という身体技法の輪郭の設定の妥当性に関しても、未だ検討の余地があるということになりはしないか。身体の動き自体と歴史的・文化的環境を併せた身体技法の輪郭を、今回の展示では「行為によるメッセージの伝達」（青木 2008:81）という技法によって、果たして十全に提示し得たのか。あるいは、その技法をほかの技法によって十全に補い得たのであろうか。

新芸能論・奄美大島の八月踊り・シマジマの柄

私はかつて、全ての言葉は生活における「入り用」から受容・創造された過去の「新語」で、それが「群」の「実験」と「承認」を経て定着・使用・廃棄されることで地域毎に変化を来してきたとする柳田国男の「新語論」（柳田 1969）に倣い、そもそも民俗芸能ほど変化しやすいものはなく、すべての民俗芸能は生活の場における「入り用」から受容・創造された過去の新しい芸能で、それが「群」、地域の人々の「実験」と「承認」を経て定着し、演じられ、

廃棄されることで、それぞれの地域毎に変化してきた結果、地域の人々の生活に密着した芸能として、各地に民俗芸能が伝わってきたとする「新芸能論」（笹原 2005）を提唱したことがあった。残念ながら、語呂が悪いのか、内容が悪いのか、「新芸能論」は一向に「新語」として定着していないが、そこから見えてくるのは、「歴史のなかのからだ」には、相当程度、地域的な多様性が存在しているということである。

民博では、2006年に「奄美大島の八月踊り」という長編映像番組を作成した。その中で、奄美大島の北部と南部の間で見られる八月踊りの類型的な芸態の違いを大きく取り上げた。昨年我々は、その番組の上映・意見交換会を、奄美大島各地の八月踊りの演者たちを相手に行った。その際多くの演者は、番組の視聴後に、南北に止まらず、自らのシマ（集落）とほかのシマの踊りに明確な違いがあることに気づき、自らのシマの八月踊りの独自性を改めて認識した旨の見解を表明していた。

私は、奄美各地を訪れることを通じ、それぞれの島は「道の島」として、「外の世界と繋がり、人や物や知識や情報が繁く往来した「道」であると同時に、往来した人や物や知識や情報が滞留し」、「他の奄美の島々と共通しながらも、他とは異なるこの島独自のものが、島外との繋がりの中で歴史的に形づくられて」きた「島の柄」、島々の地域的な多様性が存在していることを実感した（笹原 2006:31）が、現地上映会では、同一の島内のシマ（集落）の間でも明確な踊りの「シマジマの柄」、身体技法の次元での地域的な多様性が存在していることを、我々も島の人々も改めて認識するに至ったのである。

こうした「人体の歴史的・文化的外化」に加えて、「地域的外化」という側面を備えた「歴史のなかのからだ」としての身体技法を、今回の展示の「行為によるメッセージの伝達」という技法はどのように提示し得たのか。

観覧者が展示の彼方に見たもの

かつて、博物館における体験型展示の重要性の主

張においては、体験が観覧者に与える展示に対する興味付け・動機付けの効果の強調が見られた。私はそれに対して違和感を遂に払拭できなかった。興味付け・動機付けの次の段階の用意や配慮が、ほとんどの場合、十分とは思えなかったからである。体験の後、「観覧者は揺さぶりを掛けた自身の身体感覚の中に不安定に取り残されることになる。そこから、観覧者自身の思考に任せることを意図している」（青木 2008:83）という今回の展示では、私がかつて抱いたような違和感を観覧者が抱くことはなかったのであろうか。観覧者は、体験した後、戸惑うことなく、展示の彼方に何事かを見通すことができたのであろうか。

身体技法の民俗誌へ向けて

とはいえ、こうした様々な問題の所在は、冒頭で述べたように、身体技法の展示という困難な課題に

果敢に挑んだ今回の試みの価値を根本的に損なうものではない。そもそも私が指摘した問題は、芸能という身体技法のごく一部の領域に関するものであり、身体技法全般についても当て嵌まるか否かは別途検討が必要であろう。

今回の展示の試みは、一種の身体技法の「民俗誌」と考えることもできる。民俗誌が、何を見れば対象を捕捉し、何を記述すれば対象を理解したことになるのかを常に問いつつ、対象への接触・関与を継続し、自らの研究者としての対象への関与さえも分析の対象に取り込みながら、記述を様々に試み、更新し続けること、即ち「記述の無限階梯」を辿ることであるとすれば（小林 1991）、今回の展示も同様かも知れない。今回展示を試みた人々が、今後「展示の無限階梯」を辿っていく際に、ここで私が提起した問題が何らかのはなむけになれば幸いである。

（ささはら・りょうじ）

【参考文献】

- 青木俊也 2008 「展示をつくるⅡ－「あるく－身体」の記憶－」の実験」『場の記憶・からだの記憶 非文字資料の新天地』 神奈川大学21世紀COEプログラム国際シンポジウム実行委員会 pp.80-83
- 兼常清佐 1932 「民謡の楽譜について」 民俗芸術の会編『日本民俗芸術大観 第1輯』 郷土研究社 pp.25-33
- 樺山紘一 1987 『歴史のなかのからだ』 筑摩書房
- 小林康正 1991 「「民俗」記述の無限階梯－民俗学における対象と方法の革新－」『正しい民俗芸能研究』0号 pp.7-22
- 笹原亮二 2003 『三匹獅子舞の研究』 思文閣出版
- 笹原亮二 2005 「新芸能論－創出され、変化し、承認される民俗芸能－」『新高校生の音楽3 指導の手びき』 音楽之友社 pp.96-97
- 笹原亮二 2006 「海南「極」小記」『民博通信』 114 pp.30-32
- 関一敏 2002 「民俗」小松和彦・関一敏編『新しい民俗学へ－野の学問のためのレッスン26』 せりか書房 pp.41-51
- 竹内芳太郎 1932 「忘れ物をした飾山囃子」 民俗芸術の会編『日本民俗芸術大観 第1輯』 郷土研究社 pp.22-24
- 中村ひろ子 2008 「展示をつくるⅠ－研究成果発信装置としての可能性」『場の記憶・からだの記憶 非文字資料の新天地』 神奈川大学21世紀COEプログラム国際シンポジウム実行委員会 pp.77-79
- 民俗芸術の会 1932 『日本民俗芸術大観 第1輯』 郷土研究社
- 柳田国男 1969 『定本柳田国男集 第18巻』 筑摩書房
- 柳田国男 1970a 『定本柳田国男集 第24巻』 筑摩書房
- 柳田国男 1970b 『定本柳田国男集 第25巻』 筑摩書房

※本文は2008年2月24日に開催された第3回神奈川大学COE国際シンポジウム「非文字資料研究の新天地」セッションV「身体技法を展示する」におけるコメントを原稿化していただいたものである。

まとめ—実験展示は成功したか

福田 アジオ

私どもの21世紀COEプログラムは、その申請段階から研究成果を展示によって発信するということを予定し、計画書に記載していた。その際、博物館ではできない冒険的な試みを行うことを実験という言葉にこめた。博物館展示はどのような場合であっても研究成果を展示するものであり、私どもの実験展示も研究成果を展示するという点で同じである。ことさらに研究成果を展示するか、実験展示を行うという必要はない。それを敢えて研究成果を展示する実験展示と称してきたのか。それは私どものプログラム自体に関係する。

私どもの実験展示は、単なる研究成果を展示するという一般的な表現で説明するものではない。私どもの課題である「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は、茫漠とした広大な非文字の世界から、図像、身体技法、環境・景観の三つの事象を取り上げ、それらの資料化、分析法の開発、そして分析結果の発信を体系化という言葉で表現してきた。実験展示はその分析結果の発信に位置づけられる。従って、実験展示は研究成果一般ではなく、図像、身体技法、環境・景観の三つを展示という方法で統合し世界に発信することを意味した。

図像、身体技法、環境・景観の三つをただ横並びに置いて展示を構成することでは統合、さらには、体系化は実現しない。種々検討の結果、展示の中核には身体技法を置き、さらに具体的には「あるく」という誰でもが日常的に行っていることを中心に据えた。そして、図像や環境・景観との関係性を求め、三者の統合を図り、COEの成果を発信するはずであった。しかし、展示経過で確認できるように、私どもの21世紀COEプログラムの課題である図像、身体技法、環境・景観を統合して展示を構成することは実現できなかった。今回の展示は、基本

的には、身体技法に特化した組み立てとなった。各種図像資料は説明データとして活用したが、身体技法と図像が統合される展示にはならなかった。まして環境・景観は展示の中にほとんど組み込まれずに終わった。その点で、当初予定した展示を通して図像、身体技法、環境・景観を統合し、体系化するという目論見は成功しなかったといえる。その点は率直に反省しなければならない。

身体技法、特に歩くという行為に特化した展示は、そのような類例がなく、あまりに平凡であり、人々にとって自覚することのない普遍的なことからである。それを展示テーマにすることは大きな冒険であり、その点でまさに実験展示であった。展示テーマを絞り込む過程で「歩くで大丈夫？」という疑問も提起されたことには正当性があった。歩くという行為に文化が関係しているのかという大きな疑問が横たわっていた。その点に注意し、歩くという行為に文化を見るという観点を失わず、また展示を見ることで何らかの感動やショックを受けるような仕掛けを考えることにした。

展示の中心部を構成したのは、観覧者が自ら様々な歩きを体験して感じ、考える「あるく回廊」であった。参加型の展示は今までも試みられてきたが、今回の展示ではそこに中心を置き、その体験を基礎にして他の展示手法で示された資料を見て考えるという方式を採用した。会場に来た人々は、その仕掛けに興味を持ち、多くの人々が実際に「あるく回廊」を体験した。総じて好評であった。この点、成功であった。

実験展示を構想したときの実験の内容として、あと二つの点があげられていた。一つはバリアフリー、あるいはユニバーサルデザインの展示である。身体障害者の人々にも展示が有効な情報発信の方法であ

ることを示そうとした。従来からバリアフリーと言えば、主として車椅子での観覧への配慮が考えられ、多くの試みの蓄積がある。私どもも車椅子での入場を前提にして建物のエントランスからの導入を行い、種々工夫をした。それ以上に、今回の私どもの課題としたのは視聴覚障害をもつ人たちに展示を見て貰う工夫をすることであった。展示資料はもちろん、映像もまた「あるく回廊」の体験も、視覚障害者にとっては認識し理解することが困難なものである。展示内容を視覚障害者に理解できるように組み立てることを課題とした。そのため盲学校の先生方とも協議し、展示方法を考えたが、結果的にはわずかに「あるくにさわる」展示のみになった。その点いささか実験としては寂しい展示であった。

もう一つの実験は、これもすでに多くの博物館が実践しており、実験とは言えないかもしれないが、展示を作る過程に関係者以外の意見や考えを聞くということであった。一般の博物館であれば、市民参加と表現されるものである。展示準備段階、それから展示開催中に意見をもらい、その意見によって修正していくという方式である。それは計画策定で固定してしまうのではなく、計画当初から展示終了まで絶えず進化していく展示の構想である。これについても若干の試みを行ったが、時間的余裕がなく、ほとんど目に見えるほどの進化を果たせなかった。こ

れも残念な点である。

以上のように、当初計画を基準に実施した展示を点検すれば、実験展示としての目標を達成したとは言えない。限られた時間のなかで、いわゆる学芸員職を内部に持たないプロジェクト研究では、行えることは限られている。歩くことの展示に力を集中させ、その実現を図ったことはやむを得なかったと判断している。

展示は、観覧者が歩くことを自覚し、その文化を考える契機になったという点では成功したと自己評価できる。体験を中心に置いて、それを他の展示と結びつけ、歩くことの文化を考えるという仕掛けは十分に目的を果たしたと言える。特に、多くの博物館展示のように、観覧者がただ単に展示を黙々とみて帰っていくのではなく、実際に身体を用いて体験し、しかもそこには体験への案内をするインストラクターがいて、会話をしつつ、体験するということが行われた。博物館の展示コーナーにいる解説員は一方的に解説するのみであるが、インストラクターは演技で示し、解説し、疑問に答えるという役割を果たした。これは効果的であった。

この貴重な経験を生かして、本プログラムの拠点である日本常民文化研究所の展示、また大学院歴史民俗資料学研究科の博物館関係カリキュラムなどでの実験を進めていきたい。 (ふくた・あじお)

●執筆者

青木 俊也
中村 ひろ子
福田 アジオ

●研究参画

青木 俊也	神奈川大学COE教員（非常勤講師）、松戸市立博物館学芸員
榎 美香	共同研究員、千葉県立中央博物館上席研究員
刈田 均	共同研究員、神奈川大学非常勤講師、横浜市歴史博物館学芸員
河野 通明	事業推進担当者、神奈川大学日本常民文化研究所教授
田上 繁	事業推進担当者、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科教授
中村 ひろ子	神奈川大学COE教員（特任教授）
浜田 弘明	神奈川大学COE教員（非常勤講師）、桜美林大学リベラルアーツ学群教授
福田 アジオ	事業推進担当者、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科教授

●特別寄稿

笹原 亮二	国立民族学博物館准教授
村井 良子	(有)プランニング・ラボ代表取締役

ISBN 978-4-904124-07-9

神奈川大学21世紀COEプログラム
「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
実験展示「あるく—身体の記憶—」をつくる

発行日

2008年3月20日

編集

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」第5班

発行

神奈川大学21世紀COEプログラム

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1 TEL 045-481-5661 FAX 045-491-0659

URL <http://www.himoji.jp/>

制作 有限会社あむ 印刷 株式会社精興社

Printed in Japan ©神奈川大学21世紀COEプログラム2008 非売品

著作権者の文書による許諾がないかぎり、法律が認める場合を除き、本書の全部もしくは一部を複製すること、あるいは送信公開することを禁じます。

神奈川大学21世紀COEプログラム 人類文化研究のための非文字資料の体系化

2002年度から文部科学省が開始した「21世紀COEプログラム」は、世界的な研究拠点を構築するための大学支援策であり、大学院博士課程を持つ大学がその対象に採択されることを目指して競うこととなった。私どもの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は、2003年度に学際・複合・新領域の分野で採択された。この計画は、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所と日本常民文化研究所、それに大学院外国語学研究所中国言語文化専攻が加わり、学際的に研究事業を展開する構想であった。実施に当たっては、事業推進担当者に加えて、COE教員及びCOE共同研究員を制度化し、研究課題にかかわる学内外の多くの研究者に参加を要請し、共に研究に従事してもらい、目的を達成することにした。

今までの文化研究では文字に記録された事象に専ら関心が集中してきた。しかし、文字に表現されない人間の観念・知識・行為ははるかに幅広く、質量ともに大きい。それは文字で表現された事象とは比較にならない。私たちの事業は、これらのなかから①図像、②身体技法、③環境・景観の三つに絞って、それぞれの事象について資料化する方法を開発し、その結果として資料を蓄積し、蓄積した資料を分析して発信することを目的としたものである。それぞれに幾つかの具体的課題を設定した。その組織は以下の通りである。

第1班 図像資料の体系化と情報発信

- 課題1 マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂刊行
- 課題2 日本近世・近代生活絵引の編纂
- 課題3 東アジア生活絵引の編纂

第2班 身体技法および感性の資料化と体系化

- 課題1 身体技法の比較研究
- 課題2 用具と人間の動作の関係の分析

第3班 環境と景観の資料化と体系化

- 課題1 景観の時系列的研究
- 課題2 環境認識とその変遷の研究
- 課題3 環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読

そして、これら三つの非文字資料を統合し、世界に向かって発信する方法を開発することを課題に、以下の三つの研究班を編成した。

第4班 地域統合情報発信

第5班 実験展示

第6班 理論総括研究

研究事業参画者は班・課題に属し、目的達成に向かって共同研究を展開した。その研究成果は、すでに各種の刊行物やホームページで順次公開してきたが、その最終成果をデータベースや各種情報のウェブ上での発信や展示という方法で世に問い、また多くの研究成果報告書として刊行することとした。本書はその研究成果報告書の1冊である。

なお、本プログラムのもうひとつの目的として、世界的に活躍することができる若手研究者の育成がある。COE研究員(PD・RA)制度を設け、優れた若手研究者を採用し、研究活動に従事してもらうようにした。海外での調査研究を行なうための派遣や、研究成果を発表する機会を設けた。若手研究者の育成は、研究員を支援するだけでなく、拠点となる歴史民俗資料学研究所や中国言語文化専攻の研究教育条件を整え、カリキュラムを充実させ、前期課程(修士)から足腰の強い学生を養成することも構想し、具体化した。

5年間の研究を経て、私たちの拠点が世界の研究者とのネットワークを形成し、様々な形態の非文字資料を集積し、それを世界の人類文化研究に提供する非文字資料研究センターとしての役割を果たすことを構想している。本プログラムへの批判や提言を積極的にお寄せいただければ幸いである。